国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM

◎特　集　国際青年育成交流事業
日・中、日・韓青年親善交流事業

マクロコズム '96.1

vol.8

㈶青少年国際交流推進センター

特集

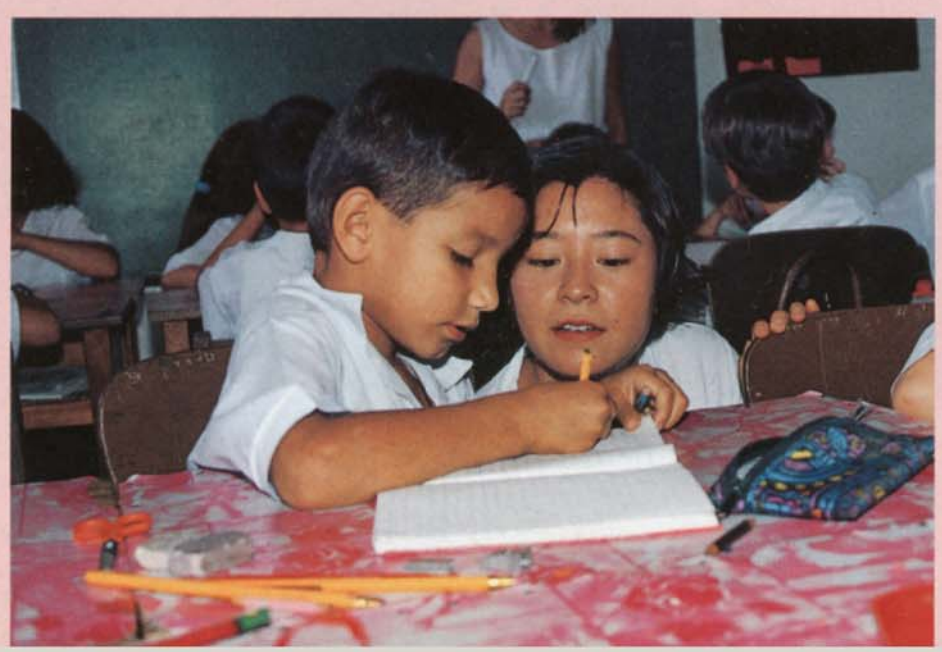
国際青年交流会議

1995年7月17日：東京全日空ホテル

「国際青年育成交流」事業に参加する日本派遣青年と外国招へい青年を含めた約300人が一堂に会しました。東京大学名誉教授木村尚三郎氏の講演及び「第7回世界青年の船」団長である上智大学教授松尾弐之氏、国際選挙監視要員としてエルサルバドル、モザンビークにおける国連ＰＫＯ活動に参加した奥井暁子さんのお話、分科会と続いた会議終了後は、皇太子同妃両殿下の御臨席の下にレセプションが催されました。

コスタ・リカ

小学校訪問（現地教育事情視察）
「今日は、何を勉強したのかな？」 ▶



国際青年育成交流事業（青年海外派遣）

皇太子同妃両殿下の御成婚を記念して平成６年度より始められた「国際青年育成交流事業」は、日本青年を世界各国に派遣する「青年海外派遣」と諸外国の青年を日本に招へいする「外国青年招へい」の二つの事業より構成されており、ともに現地の人々との共同体験交流活動を基本に置いています。平成７年度は、ブラジル、コスタ・リカ、デンマーク、ジョルダン、ネパール、タイ、アメリカ、ジンバブエの８か国への青年海外派遣が行われました。

タイ

ホームステイ先で田植えのお手伝い ▶

◀ チェンマイＹＭＣＡの植林プログラム

アメリカ

ワシントンD.C.にあるホームレスの人々に食事の世話をしている団体（MARTHA'S TABLE）の本部でサンドイッチ作りのボランティアを手伝う
１日２回、本部の他に市内３か所で給食を行う ▶

ジョルダン

▼ イスラム教の国であることを実感させる大学のキャンパス内

▲ ドゥリケルのゾルパテ小学校での生徒との交流会

ネパール

▲ コパン村のプライマリーヘルスセンターにて
青年海外協力隊の方より現地事情を聞く

デンマーク

◀ ホームステイ先で「おはし」の使い方を教える

ブラジル

再会を願って ▶

ジンバブエ

農業組合の専門職員である Mr. ムザより
▼ 農業国ジンバブエの実情を聞く

▲ ブラジルの自然に親しんで、楽しい一時

今年度派遣団員想いを語る

私の協力隊像が変わった!!

── 身近になった青年海外協力隊 ──

ネパール派遣団員　　井　澤　あけみ

「やっとネパールでの生活にも馴染んできたんですよ。初めは毎日の思いもよらないアクシデントに驚きの連続でした」

ネパールの民族衣装、パンジャビドレスに身を包んだ彼女は、協力隊として派遣されてようやく6か月だという。水道の蛇口から魚が出てきた話。突然、高い電圧が流れ、やっと手に入れた電化製品がだめになってしまった話、等々。目を丸くさせたり笑い転げながら、びっくりしたこと閉口したことを次々と話してくれた。

青年海外協力隊。名前はよく聞くけれど、普通のOLで残業や遊びに追われ、国際援助とは縁遠い生活をしていた私には、協力隊は特別の人のように思えていた。病気知らずで、体は鍛えられていて、国際援助に対しての理解が深く、自らを犠牲にして他人のために尽くす人。それが私の持っていた協力隊のイメージである。水道から魚が出てきたくらい何とも思わない人のはずだった。彼女の話を聞きながら、とても失礼かも知れないが、「なあんだ。普通の人なんだ。」と思った。少し、ほっとした気がした。私の偏った協力隊像が溶けてなくなっていった。

▲ パーチカル地域コラコダラにて
ラブグリーンネパールの植林活動の説明を受ける

主な内容

今年度派遣団員想いを語る ……5〜7
21世紀は、交流、知恵、芸術の時代……8〜11
（東京大学名誉教授 木村尚三郎氏講演）
日・韓青年親善交流事業の交流会に参加して …12
第23回中部ブロック大会を終えて……13
IYEOの国際的、全国的活動について …14〜15
世界へ行動する女性たち……16〜18
事後活動アンケート調査結果より ……19
日・中、日・韓青年親善交流事業…… 21〜22

〈表紙の説明〉
インドネシア6才の
サリン・サニさんの
「私の家族」
アジアのこども絵画展より
入賞作品

「何か自分のためにやってみたかった」インテリアデザインが専門という彼女は、まさかネパールでその需要があるとは思えなかったそうだ。「やっていけるかな」という不安な日々もあったそうだが、少しずつ、でも確実に地元の人達と共に歩み始めている。彼女の姿を見て、海外青年協力隊がとても身近に感じられるようになった。肩ひじ張らず、まずは自分の力の範囲で国際援助の舞台の１ステージに参加してみてもいいのではないか。もちろんいいかげんな気持ちで始めると苦労も絶えないし、他人も迷惑だろう。でも思いやりと頑張ろうという気持ちを忘れずにいれば、たとえ自分の為に始めた事でも国際援助の一端を担ってゆけるのではないだろうか。

私と同じような協力隊に近寄り難いものを感じていたあなた。私にもあなたにも、熱意があれば協力隊に参加して、多くを経験する可能性はあるのです。勿論、援助に対し専門的に取り組んでいる人、ずっとボランティア畑で頑張っている人が沢山います。国際援助は、それほど簡単なことではありません。でも、なんだか私にもやれるかも知れない。そんなふうに思わせてくれた貴重な体験でした。

トラックの上で本質に気づく

平成７年度タイ派遣団員　　加　藤　良　一

左右に水田が広がり真っ直ぐに伸びる国道をトラックは快調に走る。シートを付け幌を張る小型トラックの荷台には、タイ訪問団の日本青年と同行ボランティアのタイ青年数人が荷物と一緒に積み込まれている。

明るく短い曲を弾むように口ずさみ、タイ男性Ｔ君が女性団員一人を誘い遊び歌を歌い始める。リズムに合わせてＴ君の示す通りに膝や肩を叩いたり手や指を鳴らしたり鼻と耳とをつまんだりする動作を反復する。各動作は簡単だが、慣れないとつかえてしまい、慣れるとＴ君がリズムを速める。その女性があまり楽しそうに笑うので荷台上の残りの者もその遊び歌に加わり始める。

日本で慣れ親しんだバスレクゲームのことを私は考える。バス内で、マイクを使ってメンバー全員に向かうリーダーが前に立てば、各メンバーはゲームに加わらざるを得なくなる。そこには強制的に笑わそうとする雰囲気があり、生じた笑いが不自然に見える時がしばしばある。Ｔ君は車内のメンバー全員に向かいゲームを強制的にリードしたりしない。まず少人数で会話を楽しみながら持ち技のゲームを何気なく始め、活気に興をそそられる周囲を輪の中へ段々に引き込む。ゲームが面白くなれば長く続けるし、つまらなくなればすぐ止める。ここで盛り上がる笑いが自然に見えるのは、タイ国内のキャンプ場をレクレーションリーダーとして飛び回るＴ君のリード技能の高さに負うが、根本的には、メンバーを特定せずにメンバー

の心情に応じてゲームを進めるT君の姿勢に負うのだろう。日本人ばかりに囲まれ、いわば発想の似る世界だけにいたときには、中々気付かなかったレクレーションをリードすることの本質に、日本では稀な小型トラックの上で外国人を交え、いわば発想の異なる世界にいて始めて私は気付いた。

吹き抜ける風が肌を心地よくうち、薄暗い幌の下に笑い声が響き、トラックは快調に走る。

▲ コンケン大学教育学部付属小学校の音楽室にて、タイの伝統音楽を聴く

「ああ、絶景かな。絶景かな。」

平成7年度中国派遣団員　**河　嶋　由美子**

「水墨画の風景」から中国を連想する人は多いのではないでしょうか。今回私たちが訪れた「黄山」はまさにそんな場所です。安徽省南部に位置する黄山は「天下の名景は黄山に集まる」と称される名山。「五岳より帰り来たりて山をみることなし、黄山より帰り来たりて岳を見ることなし」――黄山を訪れれば五岳（泰山・華山・嵩山・恒山・衡山）もつまらなく感じるともいわれており、泰山を8時間もかけて登った私にとって黄山は大変気になる存在でした。

9月9日、19時10分、黄山空港に到着。外はすでに暗く何も見えませんでしたが、1時間20分バスで山道を登ったときはその高さを感じました。「翌朝6時10分集合」に早い！と思いながらもわくわくしながら寝たのを覚えています。

9月10日、いよいよ登山開始。といってもロープウェイに乗ったのですが……。その乗っている時点で私は、断崖絶壁、点在する松の木に「ああ中国だわ」とうっとり。でも、そんなもんじゃなかった。

ロープウェイを降りて30分ぐらい、息を切らせて登っていくと、「……スゴイ。」そこはまさに「仙人の住む山」でした。目の前に広がる雲海、その中にそびえ立つ剣のような岩、そして松の木。1秒たりと同じ顔をしない景色は本当にファンタスティック!! みなさん想像してみてください、最高に素敵な水墨画の景色を。本物はそれ以上ですョ。

それから私たちは約5時間、写真を撮ったりしながら「仙人の住む山」を満喫しました。ここでちょっとあたたかい話を一つ。絶景のポイントには鉄で作られた鎖があるのですが、そこに鍵がたくさんかけられています。これはふたりが離れないように、縁結びのおまじないだそうです。恋人（友達でもＯＫ）と訪れるときはぜひ鍵を持っていってくださいね。

21世紀は、交流、知恵、芸術の時代（講演）Ⅱ

東京大学名誉教授
木　村　尚三郎

土地ごとの知恵

土地ごとに、いろんな違った知恵があります。生活感覚も違います。例えば、太陽を日本人は赤く書きますが、ヨーロッパの人は黄色く書きますし、中国の人たちは白く書きます。太陽の色一つだって、国によって、地域によって、違うんですね。さまざまな違う文化を持った人と人とが寄り合うときに、今まで自分たちが考えられなかった新しいデザインとか、新しい色とかを思いつく。違う知恵も思いつくはずです。さまざまな人が寄り合って、その中から知恵を出し合う。これが21世紀です。

■あずきのあん

最近、日本では、和菓子、あずきで作ったあんがブームになりつつあります。あずきは、日本とか中国にありますが、欧米にはないもので、漢方薬の一種でした。あずきの粉は、肌に付けるとすべすべします。利尿効果もあります。脳卒中を防ぐ効果もあります。江戸では、このあずきに砂糖を混ぜ合わせてあんというものを作りだしました。このお菓子が、今復権しつつあります。

■野沢菜

長野県の野沢温泉には野沢菜という野菜の塩漬けがありますが、18世紀、19世紀に野沢温泉に集まってきた人々と、野沢菜が作られている産地とが一致していたということが知られています。つまり、野沢温泉に集まってきて、土地のおいしいものを食べ、自分もこういうおいしいものがほしいということで、自分の土地に帰ってその野菜を栽培して、塩漬けにしたんですね。

■イスラムの挨拶

イスラムにはイスラムの知恵があります。お客さまに行くと、お客様を呼んだほうは、「あなたに来ていただいて、私の家には光が差し込みました。」こういうふうに挨拶する。お客様のほうも、「私がやって来たのは、あなたの家に光があったからです。」こういうふうに答える。私たち日本人の知らない大変簡素で美しい人間関係があります。土地ごとにそういういい知恵があるはずです。

国家の時代から都市の時代へ

今までは、いかにいいものをたくさん作って全世界に売るか、これが私たちの生き方でした。これからは、全世界の人が一つの所に集まって知恵を発揮しあう、そのようなたくさんの人が集まる所、それこそがこれからの経済的な繁栄の場所であるはずです。そのような場が、都市でありまして、20世紀は国家の時代、21世紀は都市の時代です。国家と都市はどこが違うか。国家というのは国境をまず定めて、国境の中で国語とか、法律とか国民意識とかを一つにして、一致結束型に生きる人間集団の単位です。都市というのは、世界中色々な所から人が来る。開かれたコミュニケーションセンター、これが都市です。国家の時代から都市の時代へ、交流によって相互に新しい繁栄の道を探る、そういう時代が来ています。

都市に必要な三つの条件

そこで様々な人が出会うわけですから、都市に必要なのは三つの条件です。

1．美しさ

一つが、美しさ。美しい生き方をする。美しい形において心を伝え合う。これが大事でして、これこそがファッションというものだろうと思います。ファッション感覚というものがないと、違った人と人同志がお互い仲良くなれない。見た目に美しく、いい音がしており、いい香りもあり、おいしいものがある。空気が肌に心地よく、歩いて楽しい道がある。このような五感全体にとっての美しさ、美意識というものが不可欠です。

これがあると、つい、理性が後ろの方へ後退して、お互い仲良くなる。目はあまり働かせない方がいい。目は理性の窓でして、19世紀から20世紀の60年代にかけて、つまり近代という時代に、目を使い過ぎました。文字を読む、数字を読む、あるいは図形を見る。近代は明らかに目を多く使った時代です。鼻とか、耳とか、口とか皮膚感覚の方はあまり重視しなかった。結果として、20世紀は、極端なことを言うと、芸術を生まなかったのではないかと思います。

20世紀の芸術というのは大変に難しい。音楽も難しい。絵画も難しい。解説を聞かないと意味がわからない。本当にいいもの、美しいものというのは、見ただけで、聴いただけで、触れただけで、いいなと思うはずです。19世紀とか18世紀、17世紀の音楽は、聴いただけで、ああいいなと、心に安心がありますし、美しさがありました。また、前近代には工芸品というものがあった。つまり、実用性と芸術性が合わさっているものがありました。例えば、お茶碗ですね。見て美しく、触って美しく、お茶をいただくという実用性と芸術性が結び合っておりました。

芸術のことをアートと申します。技術もアートです。工芸品としての美しさを持っていたのが、前近代の道具というものではないかと思います。前近代の人には、明らかに美意識があった。前近代というのは、まだ産業革命が起こらず、したがって、そこでは、機能性、経済性、効率性一点ばりに生きるという、そういう生き方がない時代です。

機能性、経済性、効率性、つまり頭で生きる生き方も大事だが、同時に心で生きる生き方も大事ですね。このバランスのとれた生き方を、昔の人はしていました。芸術性と実用性が合わさった生き方。この生き方が、今、再び戻って来つつあると言っていいと思います。

昔、紀元前5世紀、中国に老子という哲学者がいて、「色があり過ぎると、目がだめになる。音がありすぎると耳がだめになる。味があり過ぎると舌がだめになる。」こう言っています。20世紀は、科学技術によって、さまざまな可能性を追求しました。ありとあらゆる色を実現し、ありとあらゆる音を実現し、ありとあらゆる味も追求した。結果として、私たちは、目も、耳も、口も、ちょっと鈍感になったのではないかと思います。これからは、嫌な音、嫌な色、嫌な匂い、嫌な味、これを限りなく除いていく。清い美しさ、あるいは、簡素な美しさと言ったらいいでしょうか。

2．安　心

二つめは、安心というものが求められるわけです。昔からの伝統にのっとったその都市なりの色とか形とか音とか味とか、こういったものがありますと、まずその地域に住んでいる人が、生きる自信と誇りを持ちます。すると、そこに旅する人も、安心があります。伝統とか歴史というものは、ついこの間まではマイナスの価値でして、家のまとまりとか、地域のまとまりとか、そういうものを断ち切って、未来に向かって、突っ込んでいく、これが近代人とされておりました。しかし、今、昔からの歴史を掘り起こして、新しい形での地域共同体あるいは家族共同体を都市に実現していく。これが現代です。歴史と伝統のいい面を掘り起こす。これをルネッサンスと申します。昔の先祖のさまざまな、例えば食べ物についての知恵、人間関係についての知恵、健康についての知恵、こういったものを掘り起こすわけです。

3．わかりやすさ

三つめは、わかりやすさです。

日本は、よくわかりにくいところと、言われますけれども、実際自分の足で旅をしてみれば、世界共通の知恵というものが働いているということが、よく分かると思います。どこでも人情があり、お互いに友だちになりあうための知恵というものがあるはずです。

美しさと、土地ごとの安心と、わかりやすさ。これこそが、これからの国際交流の大事な要件ではないかと思います。

自然、人間、歴史との共生

私どもが、全世界あちこち観光に行った時、何を楽しみたいかといえば、たぶん20世紀のコンクリートのビルではないはずです。19世紀とか18世紀とか17世紀とか、時には中世の教会堂とか、城、あるいは昔の町並みとか、昔の工芸品ですね。このような前近代のものを楽しむはずです。前近代の人、つまり、進歩、発展が実感されなかった時代の人は、明らかに美意識というものを大事にしていたということです。例えば、村も人と住まいと自然との関係が見事に調和しております。

お寺のある風景が第二の美しい自然をつくっている。このように、昔の人は、大自然とも、お互い友だちになりあった。もちろん人間同志友だちになり合った。そしてまた、過去の知恵すなわち先祖の人ともお互い友だちになり合った。つまり、自然との共生、人間との共生、歴史との共生。この三つの共生のなかに美しい生き方を実現してまいりました。

時間人間から空間人間へ

前近代そして現代がそうなんですけれども、お互いに空間感覚を拡大する時代、空間人間を大いに発揮する時代です。時間人間を生きるといいますか、明日に向かって一人だけ生きる生き方から、地球大の大きな空間感覚の中で、お互いに生き合う時代へ。まさに、今、そういった時代に入りつつあります。

その21世紀を限りなく明るくしていく、これが皆様方に与えられた課題であろうと思います。未来というものを考える人には未来が開けます。未来を考えない人には、未来はありません。21世紀を明るくイメージする。その時始めて、明るい未来が開けるはずです。お互い今まで、自分の国とか、自分の地域とかしか考えなかった私たちが、今、初めて、誰もが成功しない時代に立ち至って、人間についての共感というものを覚えてくるようになりました。日本は、ボランティア活動が非常に乏しい国であると言われておりましたが、阪神大震災におきましては、まさに若い人が、ボランティア活動に大いにエネルギーを注いだわけです。

再び芸術の時代へ

今、人間皆同じように悩みを抱えており、同じように不安があり、また、同じように大きな希望もあるはずです。今までのように国単位の生き方から、都市というものを一つの交流の場としながら、都市間ネットワークによって、全世界が始めて結び合える時代がやってまいりました。全世界が、共通の平和、共通の幸せ、共通の喜びを実現する。そういう段階に今やっと到達しようとしております。そのために、21世紀を生きる私どもは、今までの機能性、経済性、効率性、頭一点張りの生き方でなくて、何よりもまず芸術を大事にする、美しさを大事にする、心を大事にする、これが求められるのではないか。19世紀は確かに芸術の時代だった。21世紀もまた芸術の時代が来る。

（おわり）

日・韓青年親善交流事業の交流会に参加して

大　川　貴　史

テーブルについて、隣の人に「アンニョンハシムニカ（こんにちわ……」とハングルでの挨拶と自己紹介をすると、少しハングルのできる私のことを韓国の方も喜んでくれました。それから少々不慣れのハングルと日本語で「どこでハングルを習った？」「日本語を習った？」とお互いの事を中心に会話は続いていきました。10月に行われた日韓青年親善交流韓国青年招へい事業での熊本におけるIYEOとの交流会の1コマです。

顔の見える交流を

ある程度韓国の人の生活、性格を知る私でも、交流会会場のホテルに着く前から緊張していました。それは昨年度、同様に私が韓国に招かれ、各地で交流会を開いていただいたことが頭に浮かび、この熊本の地でも同じく交流会を盛り上げられるかと心配したからです。それに過去の歴史認識に関する問題発言で日韓関係が深刻な状況になるほど、日本に関する韓国の意識には、まだ冷たい部分があるのです。しかし、交流会では良き隣国の友人として過ごせたと思いました。

話題は、互いの地域、文化、韓国人観にまで及び、国際社会人としての力量を問われるものまで出てきました。思ったより話も弾み（通訳者に助けを乞う場面多しでしたが）中盤では個人芸や歌もあり、最後に人類皆兄弟みたいな顔をして記念写真に写るなど、出会って2時間余りなのに昔からの友達みたいに「今度、家に泊まりにおいで」という間柄にもなりました。

相手国の言葉で話す努力

こんな有意義な出会いと交流があったこの夜、このままでは収まらず、ユーモリスト武元熊本県IYEO会長の誘惑（?!）に負けて、熊本市内の繁華街で私的二次交流会を始めました。せっかく交流会を設けていただいたのだから、もっと話がしたいという青年が多く、国際交流の熱気を感じました。私はハングルを学んでいますが、交流の場では、相手の母国語で話すのが喜ばれると考え、片言ながらハングルを話してよかったと思いました。私たち自身も日本語で話しかけられれば、その人が我々の国を理解しようとしているんだなあと思うでしょうから。

最後に、私たち熊本県国際交流機構にとって、今回の交流事業に参加させてもらえたのはとても貴重で有意義なことでした。段取りしてくださった関係各位の皆様にお礼を申し上げます。

第23回中部ブロック大会を終えて

三重県青年国際交流機構会長
林　　由希子

今大会の目標を定めて

去る9月9日(土)・10日(日)の両日に、岐阜、静岡、愛知、三重の4県による中部ブロック大会を三重県伊勢市にて行い、60数名の方にお集まりいただきました。

さて、実行委員会を発足した当初のことです。「なぜブロック大会をするのか」「目的は何か」ということが話題にのぼりました。23回目を迎えるとはいえ同県が担当になるのは4年に一度。ブロック大会の本来の意義を問い直し、皆で確認しようとするのも4年に一度です。前回には居なかった新会員が実行委員の半数を占め、4年前の詳細な状況や反省点などは忘却の彼方へ消えようとしている状況を考えても、この話題は避けて通れないものでした。話し合いの上、「会員同志が直接会ってよい刺激を与え合うこと」「地域での身近な国際交流についてヒントを得られるものであること」を目標としました。

当日は、開会式に始まり、二つの講演、分科会、立食パーティーという内容で進めましたが、予定していた2日目の分科会のための時間を、会場の都合により充分とることができなかったことが残念でした。交通の便を考えてホテルにしたのですが、参加費が高額になったことを含めて、この点は反省として挙げられます。

講演は、実行委員長の尽力により2組の素晴らしい講演者にお願いすることができました。1台のバイクに最低限の生活物資を積み、アフリカを縦断した丹波一郎・弘子ご夫婦と、ケニアに五つ目の小学校を建設中の元青年海外協力隊員、国島司さんです。

◀田島司さん

丹羽一郎・弘子夫妻▶

「人間が生きるためには多くのものは要らない。身の回りの僅かなものだけで充分生活できることを私達は忘れているのです」「国際協力は誰のためにやっているかというとやはり自分の為なのです。小学校ができて大喜びしている子供を見て幸せを感じる自分が一番喜んでいるような気がします」というお話に、私達の今後の活動への示唆を得たような思いがしました。

参加者全員に満足いただけたかどうか、さらに反省を要するところですが、このブロック大会を通じて主に二つの成果があったと思われます。一つは、日頃例会には参加されない方が来場され、会員間のコミュニケーションがとれたこと。もう一つは中部ブロック各県の方と話し合う場が持てたことです。それをきっかけに、今、私達4県のメンバーは今後のブロック大会のありかたを見直そうと話し合いを進めているところです。

また大会を開催するにあたって、色々な方面からバックアップをしていただきました。特に県の青少年女性課の方々には厚くお礼を申し上げたいと思います。有り難うございました。

▲ 分科会で国際協力について語り合う

IYEOの国際的、全国的活動の展開について

(IYEOの歴史の中で、以下のような様々な共通活動が行われてきました。)

＊韓国身障児施設支援「善意の一坪運動」(昭和46年)

韓国で身障児施設が立ち退きを迫られていることを知ったメンバーが、その施設の敷地約1,000坪(600万円分)を買い取るため、一人が一坪ずつの代金を募金し施設を存続させようとした支援活動。当時の韓国では、反日感情が強く、日本人が韓国のために行ったこの運動は、韓国においてセンセーションを巻き起こし、その施設はその後も存続することとなりました。

＊ビルマの子供達にエンピツを贈る運動(昭和47年)

ビルマ(現ミャンマー)の初等教育対象児童100万人全員に鉛筆を送るという目標を掲げて開始された支援活動であり、机の中に眠っている鉛筆を集めることから始まりました。

活動がＮＨＫテレビ番組「スタジオ102」で紹介されたため、会員だけでなくビルマの復員兵等一般からの支援も多数寄せられ、目標を上回る112万本の鉛筆がビルマに送られました。

＊ボイス・フォーラムの開催(昭和56年～)

在日の外国青年による日本語スピーチ大会及び交流会。

この年を契機に各県ベースでの開催が始まり、岩手県・愛知県においては、現在も継続して開催

されています。

＊マザー・テレサ施設支援活動（昭和57年～）

第14回青年の船が、インドのカルカッタにある、マザー・テレサ施設を課題別視察で訪問したのをきっかけとして始められた支援活動。

活動の狙いは、単なる物資の支援活動ではなく、マザー・テレサのシスター及び協力者達の社会奉仕活動を紹介していく中でボランティアの精神とは何であるかを考え、学ぶことでした。

その後、第18回から20回の青年の船まで3回継続して具体的支援活動が行われましたが、当該事業が世界青年の船へ改組されたことに伴い実行不可能となってしまいました。現在は、IYEOが、日本のマザー・テレサ施設からフィリピンのトンドにある施設への支援物資の輸送協力依頼を受けてそれらの輸送に係わる諸手続きを行っています。

＊西サモア、トンガとの音楽交流（昭和58年）

第17回青年の船が、西サモア及びトンガに寄港するに当たって現地よりオルガンの寄贈の依頼があり、それに応えてオルガンを含めた楽器を贈る運動が展開されました。特にハーモニカの紹介が中心に行われ、トンガの国立競技場で参加青年とトンガの現地青年が共にハーモニカを演奏したことは、参加青年にとって思い出深いものとなったようです。

＊オーストラリア「カウラ募金」（昭和58年～60年）

第17回青年の船が、オーストラリアのカウラ市にある日豪交流のシンボルである「日本庭園」の維持管理経費にと船上募金をしたことを契機に、その募金活動が19回青年の船にも引き継がれ、日本青年国際交流機構も募金活動に協力したものです。

＊アジアの子供絵画展（平成6年）

シアップ・インターナショナル第7回総会が日本で開催されるに当たり、「国際家族年」を記念して開催されたもの。まず、東京で開催されたのを皮切りに全国を巡回しました。

教育・文化という身近な観点からASEANを紹介することを目的としたものです。東南アジア各国の子供達の絵は、ASEAN各国の東南アジア青年の船参加青年により収集され、その中には、フィリピンのストリートチルドレンの絵も含まれていました。

＊阪神・淡路大震災ボランティア（平成7年）

IYEOの大阪のメンバーが中心となり、避難所を1か所約1か月間支援しました。

避難所に派遣するボランティアは全国から募りましたが、日程を調整した上でIYEOのメンバーが継続的に支援できる方式としたため、大変喜ばれたとのこと。

世界へ行動する女性たち

自分に出来る国際協力の道を切り開く

鈴木睦子（第4回東南アジア青年の船参加青年
シギリヤレディーネットワーク代表）

今年は終戦50年目、あの悲惨な戦争をどうして日本は始めたのでしょう。海軍の軍人だった父は、「当時の日本人があまりにも世界を知らなさ過ぎたため愚かな戦争を起こしてしまった。これからの日本人はもっと広く世界を知り、世界の人々の幸福のために尽くさなければならない」という父自身の反省の念から、広く世界を知ることを常に勧めてくれました。

私の幼少期の日本はまだ貧しく、私はテレビで見る、物資が満ち溢れ人生を楽しんでいるアメリカに憧れました。しかし、なぜか卒業後は、仕事や人間関係も、また東南アジア青年の船を初め様々な社会活動も、途上国、特にアジアへの開発援助分野に縁がありました。

10数年前から日本の国際協力も本格化しODAのあり方への批判も高まりました。私は仕事の関係で国際協力に携わる方のご苦労、情熱は分かります。批判するのは簡単なことです。私は批判するよりも、市民という立場で、自分なりに途上国との協力に一歩深く関わってみようと考えました。

紅茶輸入で国際協力へ

朝日新聞の松井やより著「魂に触れる人々」でスリランカの紅茶農園労働者の記事を読み、初めて英国の格調高い優雅な香りのする紅茶を生産する人々の社会的背景と生活を知りました。その1年前、旅行で訪れたスリランカでしたが、彼らの存在は知りませんでした。1986年友人と私の2名で、自分たちの力の範囲で、自分たちの考える活動を、スリランカと紅茶を切り口に始めました。資金を得るためスリランカから紅茶を直輸入直売し、日常品である紅茶を仲立ちとして私たちと途上国の人々の繋がりを勉強し始めました。

当時はまだNGOや市民の国際協力は一般的でなく、紅茶、貿易業務、物を売る商売、現地調査、

紅茶園で働く女性たち ▶
（スリランカ）

現地関係者との接触、全て暗中模索。紅茶売りのおばさん稼業を始めたことを回りから不思議がられ、毎日しんどい思いの連続でした。現地で隔離されている農園労働者に接触し、どのような協力ができるか模索し、さらに日本にいる私たちと共同で支援事業を責任をもって実施してくれる現地カウンターパートを探し、信頼関係を築くのに約6年かかりました。

異文化社会の人々との踏み込んだ付き合いは非常にデリケートなことも多く、また厳しい生活環境に生きる彼等は、平和で穏やかな社会に慣れている私たちにとっては、時にはしたたかに感じることもあります。言葉の真意を判りかねる心労もあり、苦労して得た支援金を「スモール　マネー」と言われた時はガックリ。誰かに強制されたわけでもない、自分が始めた事、愚痴は言うまい、苦労や文句はお腹にしまって……。

英国は植民地時代に始めた紅茶農園の開拓と作業のために、スリランカ在住の人々を使わず、インド南部から安価で良く働き従順な低カーストのタミル人を労働者として移住させました。スリランカが独立し社会主義となっても、管理者が英国企業から政府に変わっただけで、劣悪な環境の下に生活条件は変わらず、10年程前まで無国籍のままでした。植民地時代に建てられたライン・ハウスという長屋に住み、外部の世界から完全に隔離され、一生をほとんど農園内だけで暮します。長い間管理された人々は自分で自分の生活を見直し、向上を考えることを切り落とされています。

1991年賛同者とネットワークを作り、現在会員約67名。紅茶農園労働者の生活環境改善事業、女性のための成人教育、縫製技術指導の3事業を

▲ 紅茶輸出の収益で購入したミシンで縫製技術の指導を受けている女性たち

3か所の農園で行っています。私たち外国の市民が、少しの知識と資金力と生半可な関係で彼等を助けられるとは考えていません。彼等の自助努力を手伝い、励ましになれば嬉しく思います。

体験旅行に同行した大学生の「机上の勉強ではわからない、生の現場を知って自分の何かが変わった」という感想に苦労のしがいがあったかなと……。

思えば、学生時代アメリカからの飛行機で隣に座ったアメリカ紳士から本をたくさん贈られました。2度とお会いすることのなかった青春時代の足長おじさんへの恩返しに、今スリランカの教育支援事業に携わる運命かな、とも思っています。いつの日か支援事業を受けている人々の子弟が、他国の人の教育に力を貸してあげる日を楽しみに。

〔連絡先〕
〒244
神奈川県横浜市戸塚区吉田町1118
TEL　045－881－1372
FAX　045－881－3141

登校拒否児を温かく迎えてくれたオーストラリアへ お礼の親善演奏

星 島 淑 子（第14回青年の船15班班長）

5年間登校拒否に苦しんだ小学校5年生と6年生の二人の甥を、祈るような気持ちでオーストラリアのシュナイター学校へ送りだしました。シュナイター学校は、ドイツで発祥し今やそのユニークな教育に全世界が注目し、406校が世界各地にできています。

英語が何も話せない子供たちが渡豪して1年半が過ぎました。その彼らが、いまはのびのびとルンルン気分で毎日楽しく登校しています。

「日本の学校でしてはいけないことが、この学校では逆でどんどんやりなさいって言われるんだよ。黒い服は心を暗くするから、着てはダメ。明るい服を着なさいって。だから、このスカイブルーのTシャツを着ているんだよ」

この学校では生の文化に触れさせるため、度々演劇や音楽家達を招いて鑑賞しているとのこと。そこで妹に「ぜひ来て生の邦楽を聞かせて欲しい」と言われ、私たちで役に立つのならと、門人野原多美子、大倉喜代美と尺八の人達と共に出発しました。学校は全部木造りで、蛍光灯は目に良くないと洒落たかさで包んだ白熱灯。「まるでレストランみたい！」とは同行の門人。

講堂には200人の生徒が集まり、1時間の演奏をじっと静かに聞いてくれました。いつも「本物」を聞いているから、つまらない演奏だったら騒ぐかもしれないよと知らされていたので緊張しましたが、まずはやれやれ。プログラムは他に、忍者パフォーマンス、それに妹の舞踊もあり、皆さんにとても楽しんでいただけたようでした。

いじめもない、登校拒否もない、それにテストもない学校。無邪気な子供たちの顔。肩を組み合っている笑顔。彼らを見ているといったい日本の教育はどういう人間を育てようとしているのか、と考えざるをえませんでした。

夜は、地元日本人会の主催でＡＮＡホテルでのコンサート。演奏前にはワインとスナックで軽い食事。その傍らでは子供たちのハープ演奏。「優雅ね～」。用意した席を上回るたくさんの方々においでいただき「外国の人にとっては初めての邦楽だから良いものをお聞かせしなくては」と琴に向かいました。

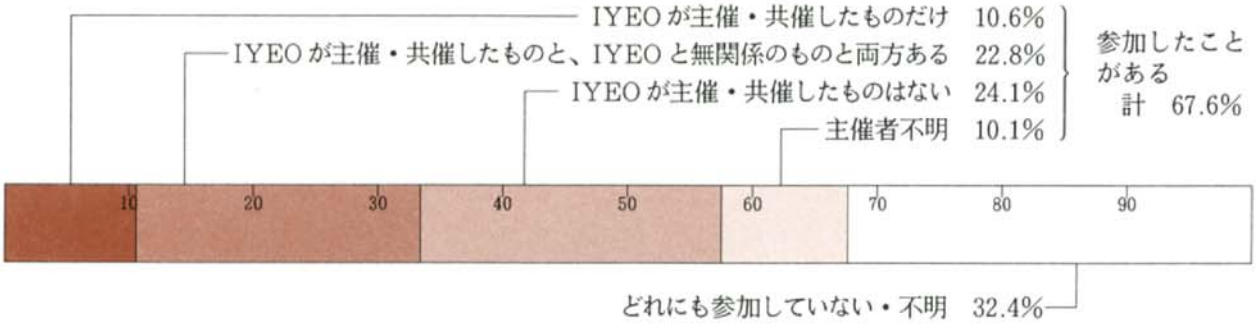
「良い時を過ごさせていただきました」と握手を求められたとき、「ああ良かった。やった甲斐があった」と海外で演奏する喜びを改めて味わいました。

最近3年間に
国際交流活動に参加したことがある＝68%

〔問8〕国内での国際交流に関する活動で、最近3年間にあなたが参加されたものがありましたら、次の中から該当するものすべてに○をつけてください。（IYEO主催のものに限りません。）

（問8で「どれもない」と答えた者を除き、問8-2に続けて）

〔問8-3〕あなたが参加された交流活動はIYEOが主催又は他団体と共催したものですか。



問8に対する回答は次のとおりです。

国際交流に関する写真展	10.2%
国際交流事業に参加した結果の報告会	18.1
既参加青年の集まり	30.3
新参加青年の壮行会	15.9
国際交流に参加した青年による全国大会、ブロック大会、都道府県大会	20.9
国際問題、地球環境問題、国際交流等に関する講演会、シンポジウム等	19.6
在日留学生との交流会	16.6
海外青年受入れの際のパーティ・懇談会等	18.2
海外青年受入れの際の外国青年の市内案内等	8.3
ホームビジット、ホームパーティ等	4.6
ホームステイ（自宅、実家での受入れ）	10.9
国際交流に関する情報誌の編集・発行	1.6
通訳ボランティア	3.6
海外援助活動（募金等）	13.2
その他	3.6%
どれもない	24.8
不明	7.6
回答合計	228.0

○「どれもない」24.8 %と「不明」7.6%を除いた回答合計は195.6%で、最近3年間に一人平均2種類の行事に参加したことになります。

また、「どれもない」と「不明」を除いた67.6%が、最近3年間に何らかの国際交流活動に参加した人ですから、これらの人だけについて見れば、一人平均2.9種類の行事に参加したことになります。

このページは、平成6年11月にIYEOの全会員を対象に行った「国際交流と事後活動に関するアンケート」（回収率51%）の結果の紹介です。

お知らせコーナー

第5回青少年国際理解セミナー

総務庁青年海外派遣事業報告会

今年度の国際青年育成交流事業、日中、日韓青年親善交流事業参加青年による事業報告会が下記の日程で行われます。総務庁の青年国際交流事業について知りたいと思っている友人、知人の方々をぜひ誘ってみて下さい。事業参加間もない青年が、その感動を熱く語ってくれることでしょう。

日　　時：1996年1月27日（土）　12：30～17：00
会　　場：国立オリンピック記念青少年総合センター　　本館第2研修室（於：東京）
参 加 費：無　料
申し込み：㈶青少年国際交流推進センターへ電話又はFAXで。

お詫びと訂正

前号でお知らせしたインターネットのホームページのアクセス表示が誤っていました。お詫びいたしますとともに訂正させていただきます。正しい表示は以下のとおりです。

SSEAYP Home Page Address: http:// www. bekkoame. or jp/ ~KAZUHIRO
（日本語キーボードの場合は、~KAZUHIRO。英語キーボードの場合は、~KAZUHIRO）

関東ブロック大会

日　程：1996年2月10日（土）～11日（日）
開催地：栃木県

編集後記

新年明けましておめでとうございます。

今回は、出来る限り多くの総務庁青少年国際事業参加者の原稿を掲載する方針で編修しました。

皆さんも、身近な体験や感動した出来事など気軽に書いてみませんか。珍しい国の情報なども大歓迎です。　（Y／R／K／H）

＊本誌の年間講読をご希望の方は、㈶青少年国際交流推進センターまで葉書又はＦＡＸにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円です。

MACROCOSM（マクロコズム）　1月号　Vol. 8　1996年1月1日発行（隔月発行）
編　集：マクロコズム編集委員会
発　行：財団法人　青少年国際交流推進センター
〒103 東京都中央区日本橋人形町2－35－14
TEL　03－3249－0767
FAX　03－3639－2436
e-mail LDP 04056 @niftyserve. or. jp
編集協力：総務庁青少年対策本部
日本青年国際交流機構
定　　価：195円（本体189円）
印 刷 所：株式会社　絢 文 社
TEL　03－3959－3960

▲ 中国の要人と会見する井出団長と金沢副団長

第17回日本・中国青年親善交流事業（派遣）

1995. 9. 1 ～ 9. 19

日中平和友好条約の締結を記念し、日本と中国両国政府の共同事業として昭和54年度に開始された事業で、二国間交流事業として我が国の青年約20名を中国に派遣するとともに中国の青年約30名を我が国に招へいしています。

▲ 安徽省青年連合会との交流会にて
連合会のメンバーが、私たちのために書をかいてくれました

▼ 聾唖学校訪問

（招へい）

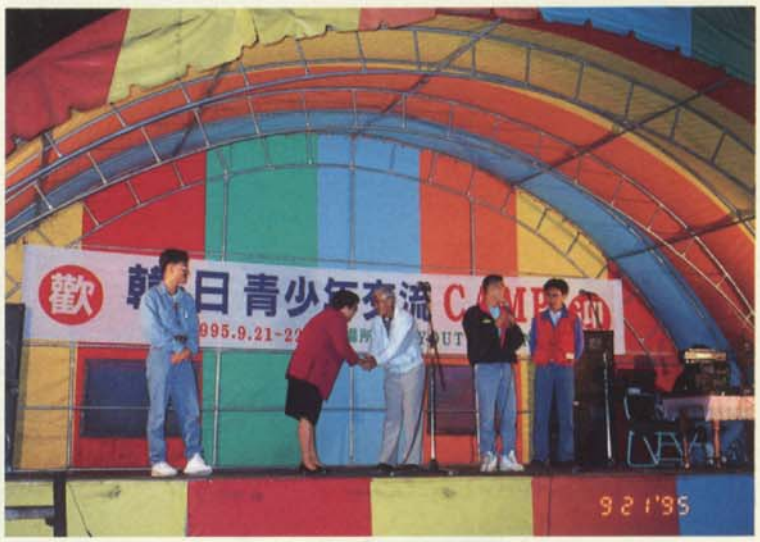
＊10月10日より28日までの日程で中国青年30名が招へいされ、東京、北海道、秋田県、静岡県、愛知県でのプログラムに参加しました。

第9回日本韓国青年親善交流事業（派遣）

1995. 9. 13 ～ 9. 27

昭和59年の日本・韓国共同声明及び昭和60年の日韓国交正常化20周年を踏まえ、昭和62年に開始された事業で両国の共同事業として日本青年約30名を派遣するとともに、韓国青年約40名を招へいしています。今年度は、山西一平団長以下30名が、ホームステイを含め、毎年交流している慶州の老人ホーム「ナザレ園」への訪問等15日間のプログラムを体験しました。

▲ ホストファミリーの大学生に日本語を教える



▲ 交流キャンプが行われたスース・タウンの開会式ステージにて

慶州ナザレ園（老人ホーム）にて
▼ 懐かしの唱歌とともに

（招へい）

＊10月9日から23日まで韓国青年40名が日本を訪問し、東京を始めとして山口県、香川県、熊本県、大阪市でプログラムを体験しました。
（熊本県IYEOとの交流会の様子…本文P. 12）

◀ 熊本県農業研究センターにて熱心に説明を聞く韓国青年